

救いの扉が開く。

常任指揮者

セバスティアン・ヴァイゲル

ヴァイオリン

成田達輝

ミジュエラウス

交響詩「マクベス」作品23

ホルン

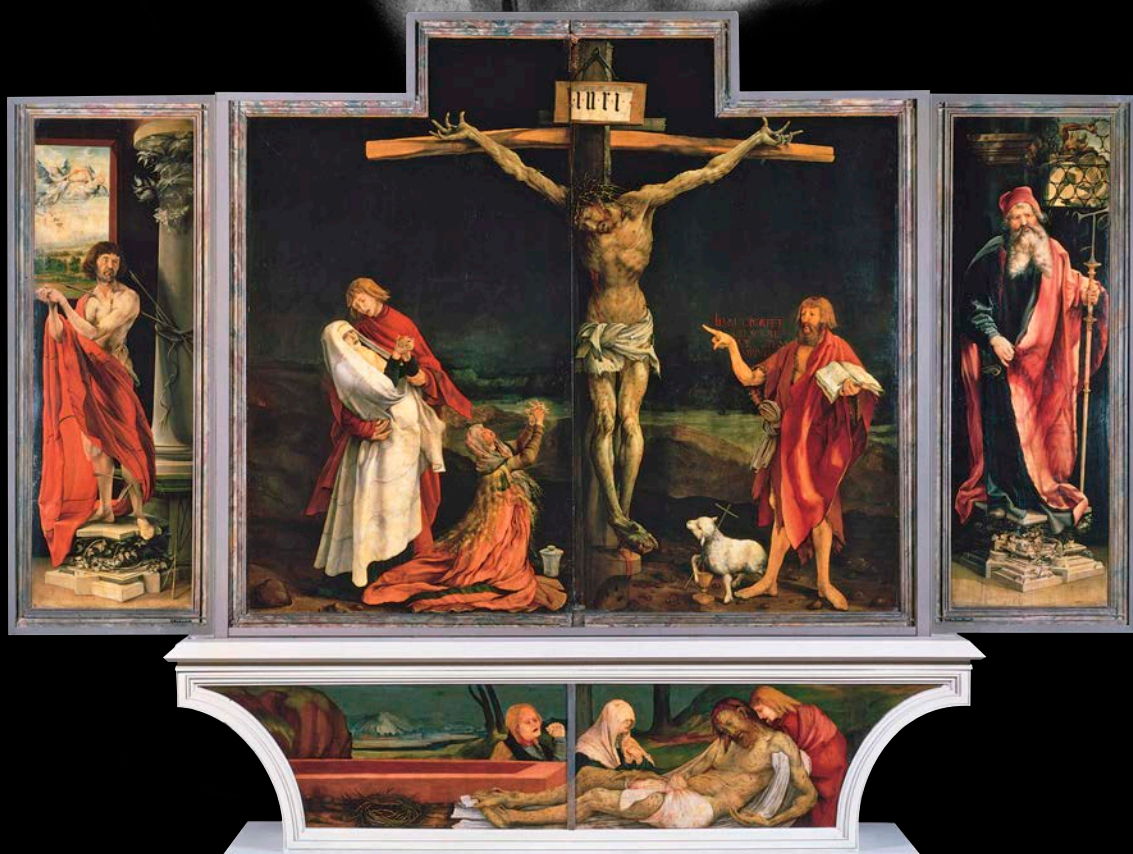
葬送協奏曲

シンデミット

交響曲「画家マティス」

読響

Yomiuri
Nippon
Symphony
Orchestra



読売日本交響楽団 第605回 定期演奏会 2021年1月19日(火) 19:00 サントリーホール S¥7,600 A¥6,600 B¥5,600 C¥4,100
主催:読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団 助成:文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業) | 独立行政法人日本芸術文化振興会 協力:フジテレビ

ヴァイグレが重要作「画家マティス」に全身全霊を捧げ、 新鋭・成田達輝がハルトマン作品に魂を込める！

1月19日《定期演奏会》には、12月公演に続き、常任指揮者セバスティアン・ヴァイグレが指揮台に上がる。12月9日のブルックナーの交響曲第6番では、ドイツ人マエストロらしい確固たる構築性や格調高い透明な響きを生んだ。今回の公演では、3つの作品を演奏する。

最初に演奏するのは、R.シュトラウスの交響詩「マクベス」。シェイクスピアの戯曲を基にした作品で、迫り来る悲劇へと持続する緊張感、甘美で享乐的な音楽が特徴だ。ヴァイグレは、読響と「サロメ」や「ばらの騎士」などで成功を収めており、シュトラウス特有の華麗なサウンドを引き出し、この演奏機会の少ない作品に新たな光を当てるだろう。

二曲目は、ハルトマンの独奏ヴァイオリンと弦楽合奏のための「葬送協奏曲」。ナチス・ドイツ政権が台頭する中で、ハルトマンは政権に抗うような作品を幾つか残したが、1939年に書かれた「葬送協奏曲」にも、ナチスへの怒りや悲しみが込められている。当初予定されていたツェートマイアーの代役として成田達輝がソリストを務める。成田は、偶然にも名ヴァイオリニストのカヴァコスに勧められ、この作品のスコアを2年前から読んでいたという。

近現代作品にも積極的に取り組んでいる成田は、作品に込められた静かな怒りを汲み取り、内面を抉るような強烈なエネルギーを露わにするだろう。

後半は、ヒンデミットの交響曲「画家マティス」を演奏する。後に発表する歌劇「画家マティス」の創作段階で、指揮者フルトヴェングラーとベルリン・フィルから依頼を受けて作曲したもので、歌劇の主要な音楽を用いて「天使の奏楽」「埋葬」「聖アントニウスの誘惑」の3楽章で構成されている。後に「ヒンデミット事件」の発端となったことでも有名だ。この曲でもドイツ・オペラを得意とするヴァイグレの手腕が存分に発揮されるだろう。

なお、この歌劇は15～16世紀のドイツの画家マティアス・グリューネヴァルトによる「イーゼンハイム祭壇画」に着想を得たもので、社会における芸術家の生きざまを描いている。「キリスト磔刑」などを含むこの祭壇画は、以前アルザス地方のイーゼンハイム村の聖アントニウス会修道院に置かれ、16世紀にはペストで苦しむ人々の心を癒していたという。今、新たな感染症で世界が苦しんでいる中、時代を生きた二人の芸術家によって紡がれた音楽が私たちの救いとなることを期待したい。

マティアス・グリューネヴァルト作
「イーゼンハイム祭壇画」
所蔵：ウンターリンデン美術館
(コルマール)



〈第1面〉



〈第2面〉



〈第3面〉



セバスティアン・ヴァイグレ 常任指揮者

2019年4月から読響第10代常任指揮者を務めるドイツの名匠。ベルリン生まれ。ベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者として活躍後、指揮者に転身。2003年にフランクフルト歌劇場でR.シュトラウス《影のない女》を振り、雑誌『オーパングェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれた。04年から09年までバルセロナのリセウ大劇場の音楽総監督を務め、08年からフランクフルト歌劇場音楽総監督の任にある。同歌劇場は「オーパングェルト」の「年間最優秀歌劇場」に輝くなど、その手腕は高く評価されている。バイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭、ウィーン国立歌劇場、ベルリン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、メトロポリタン歌劇場、ベルリン放送響、ウィーン響などで活躍している。

©読響



成田達輝 ヴァイオリン

卓越した技巧を持ち、熱いパッションを漲みながら若き実力派。1992年生まれ。パリ国立高等音楽院で学ぶ。2010年のロン＝ティボー国際コンクール、12年のエリザベート王妃国際コンクールとともに第2位に輝き、注目を集めた。クリヴィヌ、アルトリヒテル、インキネン、小林研一郎、尾高忠明、下野竜也、山田和樹らの指揮で、ブリュッセル・フィル、ルクセンブルク・フィル、ブラハ響、N響などと共演している。ホテルオークラ音楽賞、出光音楽賞など受賞多数。一柳慧、酒井健治らの作品を初演するなど、現代作品にも意欲的に取り組んでいる。使用楽器は、宗次コレクションから貸与された1711年製のストラディヴァリウス「タルティーニ」。読響とは2012年以来、2度目の共演。

©Marco Borggreve

読売日本交響楽団 第605回 定期演奏会

2021年 1月19日(火) 19時開演

サントリーホール

東京都港区赤坂1-13-1 Tel. 03-3505-1001

S ¥7,600 / A ¥6,600 / B ¥5,600 / C ¥4,100

●東京メトロ南北線「六本木一丁目」駅(3番出口)より徒歩約5分 ●東京メトロ銀座線「溜池山王」駅(13番出口)より徒歩約7分

■学生券 学生の方は、開演15分前に残席がある場合、¥2,000で入場できます(要学生証/25歳以下)。ただし席を選ぶことはできません。開演1時間前から受付で整理券を配布します。

■都合により曲目、出演者等が一部変更される場合もございます。あらかじめご了承ください。 ■未就学児のご入場は、固くお断りいたします。 ■マスク着用など、読響の「感染予防対策」にご協力をお願いします。

読響チケットセンター 0570-00-4390

*10時～18時・年中無休

読響チケットWEB <http://yomikyo.pia.jp/>

*座席選択可/チケット郵送料無料



プレイガイド

チケットぴあ 0570-02-9999

サントリーホールチケットセンター 0570-55-0017